

令和八年二月度 御報恩御講拝読御書

弁殿尼御前御書

文永十年九月十九日

五十二歳

第六天だいろくてんの魔王まおう、十軍じゅうぐんのいくさを起こして、法華經ほけきようの行者ぎようじゃと生死海しやうじかい
の海中かいちゆうにして、同居穢土どうごえどを取とられじ、うばはんとあらそう。日蓮にちれん
其その身みにあひ当あたりて、大兵だいひようを起こして二十余年にじゅうよねんなり。日蓮にちれん一度いちど
も退しりぞく心こころなし。しかりといえども弟子等でし・檀那等だんなの中に臆病おくびよう
のもの、大体だいたい或あるはを墮ち、或あるは退転たいてんの心こころあり。尼あまごぜんの一文いちもん不通ふつう
の小心しょうしんに、いまゝでしりぞかせ給たまはぬ事こと申もうすばかりなし。

令和八年二月度 御報恩御講 『弁殿尼御前御書』 (御書六八六六八行目〜二二行目)

【通釈】

第六天の魔王は、十種の魔軍を起こして、法華經の行者と生死海の海中にあつて、凡聖同居の穢土をとられまい、奪おうと争っている。日蓮は法華經の行者として、大兵を起こして戦うこと二十余年である。日蓮は一度も退く心はない。しかし弟子等・檀那等の中で臆病の者は、大方ある者は退き、ある者は退転の心がある。尼御前が一文不通の心弱い身でありながら、今まで退転しなかったことは、言い尽くせないほど立派である。

【主な語句の解説】

第六天の魔王：欲界の六欲天の頂上・他化自在天に住む天王のこと。望む物は何でも奪い取り、思うままに楽しむ境界にあるとされる。仏道修行者を妨げるため魔王と呼ばれ、人の命や功德を奪うので奪命・奪功德者ともいう。

十軍：仏道を行ずる人を悩乱する煩惱を、魔の軍勢として十種に分類したもの。『大智度論』(大正藏二五―一六九)に説かれる十種は次のとおり。①欲望。②憂愁(憂い悲しむこと)。③飢渴(飢えと渴き)。④渴愛(五欲への愛着)。⑤睡眠。⑥怖畏(おそれ)。⑦疑悔(疑いや後悔)。⑧瞋恚(いかり)。⑨利養虚称(名利名聞に執われること)。⑩自高蔑人(思い上がって人を侮ること)。

生死海：生死の苦しみが深く限りないことを海に譬えた言葉。

同居穢土：聖人と六道の凡夫が同居する穢れた土のことで、娑婆世界をいう。

大兵：「だいひょう」と読み、選り抜きの兵、精兵のこと。「たいへい」と読むときは、大軍の意となる。

【背景と大意】

本抄は文永十(一二七三)年九月十九日、日蓮大聖人御年五十二歳の時に、佐渡の一谷から六老僧のひとり・弁阿闍梨日昭(弁殿)と尼御前に与えられた御書です。尼御前は鎌倉在住の篤信の檀越で、日昭の母または姉、あるいはは棧敷に住む妙一尼と同人とも伝えられています。

本文ではまず、安倍貞任や平将門が、朝廷へ謀反を起こしたものの、ともに戦いに敗れ滅ばされた事例を述べられています。そして今はまた、第六天の魔王が起す戦いに対し、大聖人が退くことなく戦い続けてきたことを述べられます。

一方、大聖人の弟子や信徒の多くは、障魔に負け退転していくなか、尼御前は健気にも信心を貫き、さらに今回、佐渡の大聖人の元へ使いを遣わした志を、釈尊をはじめ諸仏も御照覧のことであろうと、その信心姿勢を賞賛されています。